



あの時、避難所は… “おだがいさま” が支えた169日間

—福島県内最大級の避難所「ビッグパレットふくしま避難所」が教えてくれたこと—

日時：2012年11月7日（水）18：30～21：00

会場：立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

講師：天野和彦氏（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 特任准教授）

司会：阿部治

みなさん、こんばんは。天野と申します。福島のことを発信できる機会を設けていただいたことに、心から感謝しております。

まず、大規模避難所でということがあったのかについてお話させていただきます。現在の取り組みなどについては、その後に、阿部先生との対談の中でご紹介できればと思っております。

■「おだがいさま」とは？

「おたがいさま」という言葉は標準語ですが、福島では「た」にも濁点がつきまして、「おだがいさま」と言います。この言葉は、英語に対応する単語がないそうです。世界共通の定義ではない。それは「何か見返りを期待するような行為」ではなく、相手の状況に寄り添って、「こんなふうにしてあげたら、相手は嬉しくなるに違いない」、「こんなことをしてあげれば、相手の気持ちはあたたかくなるに違いない」と思っで行うものだからではないでしょうか。この「おだがいさま精神」とは、まさにそういう意味で、日本の文化なのだろうと思います。

「おだがいさま精神」に支えられた169日間。それは「ビッグパレットふくしま」（以下「ビッグパレット」と略記）という、東京ビッグサイトのようなコンベンション施設に一時避難された方々が助け合い、励まし合って暮らした169日間でした。とくに、原発立地である富岡町、富岡町に隣接する川内村の方々が2,500人以上も、そうした非居住空間の中で、日常生活を送られていたのです。

この大規模避難所に、被災者の方々が入所した2011年3月16日から、避難所が閉所を迎えた8月31日までの169日間に、一体どんなことがあったのか。マスコミには取りあげられなかった話も含めて、それを福島から発信するという意味で、私の報告を聞いていただければと思っています⁽¹⁾：スライド・資料番号、以下番号のみ表記。

■「生きていても仕方ない」

2012年5月29日、地方紙の朝刊に、このような記事が出ました⁽²⁾。「避難生活限界に」「自宅近くに遺体 自殺か」。注目すべきは「生きていても仕方ない」という見出しです。このときに亡くなられた、60歳を少しこえたくらいの男性が残した、遺書の一文です。

男性は、スーパーマーケットを経営されていた自営業の方で、原発立地の浪江町から避難されていました。いわゆる双葉8町村の中の浪江町から避難していたのは、県庁所在地の福島市でした。一緒に避難をしていた仲間たちからの「避難先で商売を再開しないのか？」という問いかけに対して、「俺はふるさとに戻って



天野和彦（あまの・かずひこ）

1959年、福島県会津若松市生まれ。福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授。おだがいさまセンター（富岡町生活復興支援センター）長。障害児教育を専門として15年間、障害を持った子どもたちの教育に携わる。1997年、大玉村教育委員会社会教育主事。2002年より県教育庁生涯学習文化グループで「県民カレッジ」の立ち上げ準備を行なう。2004年より県男女共生センター勤務。2011年3月11日の東日本大震災、東京電力福島第一原発事故に際し、約2500人の被災者を受け入れ、福島県内最大規模といわれた「ビッグパレットふくしま避難所」の県庁運営支援チーム責任者として運営に携わる。2012年4月より現職。被災者の生活再建、コミュニティ形成のための支援活動を行なっている。

あの時、避難所は… “おだがいさま” が支えた169日間



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

からやりたい」と何度も答えていたそうです。

ふるさとに戻れるのか、戻れないのか。政府は収束宣言の後、マスコミを通じて、あたかも除染をすれば帰れるかのような印象を与えるコメントを繰り返し、今も流し続けています。多くの住民の方々は、一時帰宅という名目で許可証を得て、防護服を着て自分の家に帰るわけですが、帰るたびに「もう無理だ」と誰もが思っているのです。

「3.11のまま、時間が止まったようだ」という報道がされますが、実際は残酷なほど、確実に時は刻まれています。たとえば、家の瓦屋根のてっぺんの、ちょうど三角形になっている上の部分を「ぐし」と呼びますが、多くの家は、地震で「ぐし」が壊れてしまいました。そして、壊れた部分から雨水が染みこみ、天井板を抜けて畳に落ちていくのです。やがて、畳が腐り、床板まで腐っていきます。餌を目当てに、家畜として飼っていた豚や牛も入ってきます。住民の方々は、そうした光景を見るたびに「もう無理だ」、「もう帰れない」と思っているのです。

この男性も、一時帰宅の時に亡くなられているわけですが、かねてから「ふるさとに戻ってからやりたい」と漏らしていた願い—希望を、おそらく彼は失ってしまったのではないかと。人は希望を失うと死んでしまうということが、はっきりとわかりました。「生きていても仕方ない」というのは、それを示す言葉だと考えています。

今の私の仕事は、このような希望をなくした方々をつないでいくものです。ただ希望を「語る」のではなくて、希望を「つくりだす」ことに、私の仕事の本分があると考えています。

■女子高校生の「夢」

「ふるさと」という言葉は、平仮名で書くと、たった4文字の日本語です⁽³⁾。私自身、福島県民の一人として、この約1年7ヵ月、何度も声に出してつぶやいた言葉であり、何度も心の中でつぶやいてきた言葉です。21世紀の日本で、東北の福島で、今この瞬間もふるさとがなくなるかもしれない人たちがいる、という現実があるのです。

私が支援に入っている富岡町という福島第二原発のある地域には、県立富岡高校という高校があります。そこに通っている、2年生の17歳の女子生徒の話聞く機会がありました。彼女は言いました。「私には夢があります」。私が「どういう夢なの?」と聞くと、こんな答えが返ってきました。

「あの3月11日の午後2時46分、私たちは授業を受けていました。授業中だった教室を激しい揺れが襲ったことに驚き、ただ茫然としていた生徒たちに、先生が大声で叫びました。“早く机の下に隠れなさい!” 私たちは慌てて机の下に隠れました。ところが、あまりにも激しい揺れで、頭の上にあるはずの机は、いつの間にかどこかに吹き飛んでしまっていて、頭を守るものが何もなくなっていました。これから一体どうなるのだろうと思ったとき、一瞬、揺れが止まりました。すると先生が“早く校庭に逃げなさい!”と叫びました。私たちは慌てて校庭に逃げました。それから、もう二度と教室に戻ることはできませんでした。あの時、授業中だった教室で机の上に開いていた教科書と、ノートと、筆箱から出していた鉛筆



を、いつか必ずあの教室に戻って、私の手で教科書を閉じて、私の手でノートを閉じて、私の手で鉛筆を筆箱に戻してやりたい。それが、私の夢なのです」

この話を聞いたとき、私は、本当に胸がつぶれそうになりました。これが17歳の若者の持つ夢なのか。普通の高校生なら、たとえば「好きな芸能人に会ってみたい」、「将来こういう仕事に就いてみたい」、「いつか素敵な人に巡り会って、結ばれて、子供を産んで、幸せに生活を送りたい」……そんなことを願ったり、空想したりするものではないでしょうか。しかし、「いつか必ず教室に戻って、自分の手で教科書やノートを閉じて、筆箱に鉛筆を戻してあげたい。それが私の夢だ」と言わざるを得ない若者がいる。これが今の福島の実現であり、ふるさとがなくなるということは、そういうことなのだと思います。

今日お集まりのみなさんにも、ふるさとがありますよね。たとえば「中学校の部活動の帰り、夕暮れの道を歩いた、あの町にもう二度と帰れない」と言われたら、どうお思いになりますか？

■住民に下された避難命令

福島県は3つの地方に分かれています⁽⁴⁾。太平洋岸の浜通り、東北新幹線や東北自動車道が通っていて、福島市や郡山市がある中通り、それから、私のふるさとの会津若松市がある会津地方です。福島県は非常に広く、会津地方の南会津だけでも、神奈川県とほぼ同じ広さがあります。それだけ非常に広い県土を持っている地域です。

福島第一原発は、双葉町と大熊町の間にあり、そこから10kmほど離れたところに、福島第二原発があります。今日は、福島第二原発がある富岡町、隣接する川内村、そしてそれぞれの住民が避難したビッグパレットがある、60kmほど離れた郡山市、この3つの地区を中心にお話したいと思います。

2011年3月12日の地方紙の朝刊に「原発の安全神話 崩壊」「住民、不安の脱出」「抽出3人全員被ばく」という見出しが躍っています⁽⁵⁾。その下に車の列の写真がありますが、この写真は3月12日の朝7時30分頃に撮影されたものです⁽⁶⁾。

遡ってみますと、3月11日の午後2時46分に地震が起きました。原子力災害の影に隠れて、地震や津波の被害の報道は薄まっているように感じますが、富岡町にも大変な被害がありました。富岡町には、富岡川という太平洋に注ぐ川があります。富岡川の上には、高さ14mほどの橋が架かっていました。小学校の校舎でいうと3階の上ぐらいの高さです。

発災直後、1台のパトカーが2名の警察官を乗せて、富岡川の橋のところに行きました。彼らの仕事は、町の状況、町民の避難の状況を確認することで、橋から町の状態を見るためにその場所に来ていたのです。もちろん彼らは津波が来ることを知っていましたが、橋の高さは14mあるので大丈夫だと思っていたのでしょう。ところが、実際に富岡川を襲った津波の高さは21mでした。そのパトカーは、随分時間が経ってから、原形をとどめない状態で発見されました。乗っていた警察官のうち1名は遺体で見つかり、もう1名は未だ行方が知れないそうです。それほど津波の被害はひどく、地震でも大きな被害に遭ったわけです。



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

そうした状況を見て、家を失った方、家が壊れた方、怪我をした方、家族と離れ離れになってしまった方々のために、役場は急遽、避難所を開設しました。夕方近く、炊き出しの準備をしなければならない時間帯になりましたが、情報は遮断されたままでした。国からも県からも一切情報が入ってこない。テレビもダメ、パソコンもダメ、固定電話も携帯電話もダメ。噂のようなものでしか、情報は入ってこない状況でした。

17時過ぎ、福島第一原発で働く東京電力の社員が逃げ出しているらしいという噂が流れてきました。それから、夕闇が濃くなってきた19時頃には「たくさんバスの大熊町に向かっているらしい」、「大熊の町民が避難を開始したらしい」という噂も流れました。役場は避難所の運営を続けながら、幹部職員を集めて会議を開きます。

「我々は、一体どうしたらいいのか。ここに留まるべきなのか、それとも避難すべきなのか」。

夜通し議論していましたが、誰も正確な情報を持っていない。明け方近くになって、町長が「町民を避難させよう」と判断を下しました。そして隣接する川内村に避難の受け入れを要請し、村長は快くそれを受け入れましたが、人口16,000人の富岡町に対して、川内村の人口は3,000人ほどです。16,000人全員は無理。結果的に6,000人ほどが川内村に避難しました。川内村に行けない人は、いわき市や福島市、あるいは他の市町村に避難することになりました。富岡町の住民に避難命令が出たのは、3月12日の午前7時。その30分後の姿が、この新聞の写真です⁽⁶⁾。

写真の奥が富岡町、手前が川内村です。このとき、彼らに伝えられた情報は、たった二つでした。ひとつは「どうやら、福島第一原発の原子炉が吹き飛んだらしい」。もうひとつは「だから早く逃げろ」。この写真の車列は富岡町からずっと続いているのですが、車が進んだ距離は1時間にわずか50m程度でした。

私はこの1年数ヶ月の支援活動の中で、支援には様々な力が必要になるということを感じました。実行力、行動力も必要ですし、企画力も必要です。その中で、最も必要だと思った力は「想像力」です。どうか、みなさんも想像力を持って、この写真をもう一度眺めてください。もし、みなさんがこの車列の中の1台に乗っていたとしたらどうですか？ おそらく自分一人ではなかったでしょう。自分の連れ合いと一緒に、両親と一緒に、子どもや孫と一緒に……。しかし、車は遅々として進まない。いつ後ろから放射線が襲ってくるかわからない恐怖におびえながら。放射線には、匂いも色もついていないわけですから。

今でも多くの方たちは、この時のことを思い出すのも嫌だと言っています。PTSD（心的外傷後ストレス障害）になってしまう子どもたちも多い。夜中にギャーッという声とともに起きて「こわいよお、こわいよお」と泣きます。そのたびに親が「もう大丈夫だよ、何もこわくないよ」と言って抱きしめる。たった一枚の写真ですが、写真が物語るものはたくさんあります。

2011年6月に富岡町に入った時の写真です⁽⁷⁾。被災地の状況は、写真の状態よりも、実際は遥かにひどくなっています。それはそうですね。手つかずなわけですから。東日本大震災の中で、福島県が、岩手県・宮城県と決定的に違うのは、



「二重のくびき」があることです。福島県の「二重のくびき」とは、地震・津波と原子力災害です。原子力災害によって、もともとの居住地だった場所に住むことができないという状況があります。

今までの災害で、これほど広域にわたる、避難を含めた災害はなかった。近いものがあるとすれば、三宅島の全島避難です。そういった状況が今なお続いていて、さらにひどくなっています。そこには、復興どころか、復旧のスタートラインにさえ立てていないという状況があるわけです。

ですが、そうした言葉は、半分は当たっていますが、半分は間違っていると思っています。たしかに、道路、橋、建物、下水道なども含めたインフラの整備という面では、復興どころか、復旧のスタートラインにさえ立てていませんが、復興の主人公は「人」です。少しずつですが、人々の気持ちは、町に住めるように、帰れるようにという方向を向きはじめたように感じています。たとえば、建物や道路が大丈夫になって、橋も何もかもきれいになったとしても、住民の気持ちが離れていたら、復興など夢のまた夢ですから。

私たちが今できる、復興に向けての取り組みは、「心の復興」なのかもしれません。あるいは「人間の復興」と言ってもいい。つまり、一人一人の心を丈夫にすること。今までもそういった活動に取り組んできましたし、これからもそれを強めていきます。インフラの整備はまだまだですが、一人一人の気持ちを丈夫にしていくことが重要だと思うのです。

■変わり果てたふるさとの風景

誰もいなくなった富岡町のメインストリートの写真です⁽⁸⁾。街並みは問題ないように見えますが、一軒一軒を見ると、すべて壊れています。道路の色が変わっている部分が見えますか？ブルーシートが上から被せられています。これらは道路が陥没した部分です。役場の下水道の担当者が言っていました、この状況を見ただけで下水道が減茶苦茶になっていることがわかるそうです。10数年かけて、70数億円もかけてつくってきた下水道のネットワークが減茶苦茶になっているのです。

政府は「除染をすれば帰ることができる」と言っていますが、そんなに単純な問題ではありません。住む家そのものが壊れていたり、家が大丈夫だとしても、トイレに行かない人はいませんから、下水道という視点からだけでも、除染をすれば帰れるというのは幻想と言わざるを得ません。

2011年11月に富岡町に入った時の映像です⁽⁹⁾。先ほどの車列の写真とは逆方向で、川内村から富岡町に向かっています。町外れになった時、私は声を上げるほど驚きました。町が見渡す限り真っ黄色だったのです。福島は米どころなので、田んぼが広がっていますが、田んぼという田んぼがすべて真っ黄色。その原因は、セイタカアワダチソウ、通称ブタクサと呼ばれている植物でした。2011年11月、地震からわずか数ヶ月でこんなに荒れてしまったのだと、見ているだけで涙が出てきました。人が住まなくなるとこうなる、という事実が、はっきりわかったのです。

相変わらず、牛がいました⁽¹⁰⁾。野生化して、繁殖して、ファミリーになっていました。



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

ダチョウも自由に闊歩しており、作業員から餌をもらい、喜んで食べていました⁽¹¹⁾。

JR富岡駅前——正確には駅前だった場所にも行きました。駅舎もすべて津波で流されていました。小さな町の駅前に降り立つと、町の地図や町の花、町の鳥など、町の見所が大きな看板に記されています。これは、その中の1枚をデジカメで撮ったものです⁽¹²⁾。富岡漁港と小浜海岸と書いてあります。この風景をなぜ撮ったかといいますと、富岡町の人たちにとって、これがふるさとの風景の一つだということを知ったからです。

「ふるさと」といったら、何を思い浮かべますか？ きっと人それぞれ、自分だけの場所があるのでしょう。富岡の人たちは、この風景だと言う人が多くいます。東北の田舎町のひなびた漁港といった風情がありますね。写真の上の方に見えるのが海岸です。海岸には波で浸食されてできた岩があり、岩の上に松が生えていますが、ろうそくの炎のように見えることから、地元の人たちは「ろうそく岩」と呼んでいます。この漁港と「ろうそく岩」が、富岡の人たちにとってはふるさとの風景の一つでした。今はもう「ろうそく岩」はありません⁽¹³⁾。

富岡町の人たちは、海沿いに住まわれているので、一時帰宅すると海へ行きます。「多くの命や財産を奪った海だけど、どうしても海を憎むことはできない」という言葉が非常に印象的でした。そして、海を見て「ろうそく岩がなくなっちゃった」、「ふるさがなくなっちゃった」と言う人もいました。

こちらが漁港です⁽¹⁴⁾。漁港といっても、一艘の傾いた船だけが、わずかに漁港だったことを偲ばせる程度です。漁港の建物本体は、鉄骨が鉛のように曲がってしまっ、形をなしていません。もちろん、この漁港も防護服を着ないと入れない場所です。写真中央奥に見える煙突は、福島第二原発の煙突です。こういった場所から、富岡町の人たちは避難しました。

避難所で知り合ったおばあちゃんは、地震の翌朝、自分の薬がなくなっていたことに気がつき、知り合いの医者に「どうしても薬が必要だから」と頼みこんで、薬をもらってきたそうです。病院から出たところに町のバスが停まっていた。降りてきた職員に「ばあちゃん、早くバスに乗って」と言われ、おばあちゃんは「急に町が親切になって、私のことを乗せてくれてねえ」と思ったそうです。ところが気がつくと、おばあちゃんは60kmも離れた郡山市の避難所にいたわけです。「この薬の袋だけ持って、私は来たんだ。本当に着の身着のままだった」。コミュニティも崩壊したまま、避難せざるを得なかったわけです。

先ほどの話に戻りますが、2011年3月12日に、約6,000人の富岡町民が川内村に避難しました。そのときには、誰もが2、3日すれば帰れると思っていました。ところが、1回目の水素爆発が3月12日に起こり、わずかその2日後の14日には2回目の水素爆発が起きるわけです。

14日の爆発は3号機です。3号機は、MOX燃料（ウラン・プルトニウム混合酸化燃料）を使ったプルサーマル計画に基づく発電機です。政府が2ヵ月ほど経ってから発表するわけですが、あれほど飛ぶはずがないと言われていた重金属が、3号機の爆発によって飛び散ってしまいました。たとえば、静岡の茶畑ではストロ



ンチウムが見つかりました。もっと驚くことは、プルトニウムも見つかったのです。プルトニウムなんて、セシウムどころではありません。半減期が2万年ですからね。そういうものが日本全国に飛び散ったわけです。

これは、福島だけの問題、東北だけの問題ではありません。オールジャパンでこの問題を考えていかなければならないというのは、そういうことなのです。

3号機の爆発後、今度は30km圏内まで避難しなければならなくなりました。受け入れたはずの川内村の村民まで、一緒に避難しなければならなくなった。

富岡町・川内村と連れ立って、阿武隈山系を抜けて田村市に行きました。田村市も快く受け入れてくれましたが、たちまち人でいっぱいになり、「これ以上は無理です。次の町に行ってください」と言われました。次の三春町も快く受け入れてくれました。でも、また同じ状況です。どこに逃げればいいのか。郡山に行くよう指示がありましたが、中通りも大変な地震の被害がありました。

ビッグパレットがある郡山市は震度6弱、私が住んでいる須賀川市は郡山の隣町で、車で10分ほど行ったところのベッドタウンですが、須賀川市は震度6強です。富岡と同じですね。須賀川市の5階建ての市役所は全壊ですから。ビッグパレットもイエローカードが貼ってある。つまり、人を入れることができないのです。「これほどの人数をどこに連れて行ったらいいのか。ビッグパレットしかないだろう」ということで、政治的な判断が最終的に下された結果、突貫工事で修理をし、人を入れることになりました。

最終的に彼らが避難を終えたのは、3月16日の深夜。福島は雪が降っていました。本当に寒い日でした。今でもはっきりと覚えています。

その頃、私は、相馬市の、海から2kmほど離れた、ある小学校の体育館に設けられた避難所で支援を行っていました。小学校の体育館ですから、収容できる人数は100～150名くらいです。ビッグパレットの2,500名というのは、本当に異常な数だったということがおわかりいただけるかと思います。この原子力災害によって、全地域避難をせざるを得なかったために、そういう異常事態が生じたと言えるのではないのでしょうか。

■ビッグパレットふくしまへ

ここからは、避難所の中での取り組みの話に移ります⁽¹⁵⁾。

私がいた相馬市の小学校の体育館には、小学校区から避難をしてきた方々も受け入れていましたので、中には町内会長や区長、民生委員、地域選出の議員もいて、役割分担をしながら自治をしやすい状況にありました。当時は、放射線の関係もありましたから、外出を自粛することになり、ストレスケアのため、避難所の中に図書館や映画館をつくりました。

4月9日の朝8時半に、県の災害対策本部から「すぐ災害対策本部に出頭してください」と電話が入りました。「今、住民のみなさんが目の前にいるので、行けません」と答えると、「いつなら来られますか」と言う。「夕方なら」と返事をして、9日の夕方に災害対策本部へ行きました。到着すると、県の幹部職員が3人いて、ただならぬ雰囲気でした。



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

私がソファに腰を下ろすか下ろさないかのうちに「ビッグパレットに行ってくださいませんか」と言われました。「ビッグパレットが一体どうしたのですか？」と聞くと、「人が死ぬかもしれない」と言うのです⁽¹⁶⁾。今だからこそ言える話ですが、当時はシークレットでマスクミに漏れたら大変なことになる情報でした。

「人が死ぬかもしれないって、一体どうしたのですか？」

「疑いも含めてノロウイルス感染者が30数名出ていて、ビッグパレットの中で隔離されています」

さらに風紀上の乱れもあり、正常化が必要だということでした。「役場は何をやっているのですか？」と聞くと、「もう役場職員も限界で、県が介入するしかないと思う」という答えが返ってきました。県は、県内すべての避難所で運営の支援を行っていて、3日くらいずつ交代で、次々と様々な人たちが出入りしている状況でした。そんな中で「ビッグパレットは特別な状況があるので、常駐のチームを派遣したい。だから行って欲しくないか」という話だったのです。

すぐ翌日から行くのだと思っていましたら、幹部職員から「1日ゆっくり休んでもらったほうがいいと思う」と言われました。少し変だなと思ったのですが、それまで1日も休んでいなかったのが、4月11日に現地へ向かいました。わずか7名ほどのチームでした。

ビッグパレットに着いて、目の前に広がった光景を見たとき、一体どうしたらいいのだろうと思いました。この状態はどこから手を付けていったらいいのかと、途方に暮れてしまったのです。

絨毯は敷いてありましたが、硬いコンクリートの床に毛布を2、3枚敷いただけで、老いも若きも横になっていました。お年寄りも目を瞑って眠っているのか起きていないのかわからない。若者も仰向けになって、携帯電話やゲームをいじっている。食事の連絡があると段ボールの箱を持って行列に並びます。ご飯をもらってくると寝床に戻り、食べてまた寝るという生活。

避難している人たちは特別な人たちではありません。3月10日までは、社会で一定の責任を持って生活を送っていた社会人です。今日ここにお集まりのみなさんと、何ら変わりはないのです。発災後、わずか1ヵ月で人間はこうになってしまうのだ……。人間は本当に弱くて、脆いのだなとその時には感じました。しかし、そうではないとあとで気づくことになります。

4月下旬の避難所の写真です⁽¹⁷⁾。それでも、きれいなところを撮っています。段ボールをあちこちから見つけてきて、空間を仕切っていました。2,500人という、福島県あるいは東北で最大級の避難所でしたが、首都に直下型の災害が起きた時には、崩れかけた東京ビッグサイトに1万人規模の避難所ができることは容易に想定できます。ですから、今回のビッグパレットでの避難所運営の知恵、大事ではないかと感じています。そんな災害が起きないことを祈っております。

この写真は2階から見たところですが⁽¹⁸⁾。一定の区画割りをしています。ごちゃごちゃと荷物があります。上に見えるのが、空中廊下になっているところ。縦の針金のような線も廊下で、そこにも人が住んでいました⁽¹⁹⁾。硬いコンクリートのタイルの床に段ボールの仕切りをつくり、配られた毛布を敷いて寝ています。



向こうから人が歩いて来ても、人と人がすれ違えないような状態でした。

ビッグパレットの応急措置はしましたが、すべて対応できたわけではありません。1階にあるコンベンションホールはシアター形式で、椅子だけ並べれば1,000人ほど入ることができるスペースです。多目的展示ホールは非常に広い場所でしたが、天井板があちこち抜け落ちていて、100kg近くある空調も床に転がっており、天井を支える鉄パイプが床に降り注いで、長机に斜めに突き刺さっていました。

4階のUの字になっている部分は全面ガラス張りですから、応急処置だけでは、人を入れることはできません。3階は小分けになった通路を含めた部屋です。2階には部屋がほとんどなく、レストランとロビーしかありません。

1階のコンベンションホールや、小分けになった倉庫、通路も含めたところに避難者が暮らしていて、トイレの前にも人がいました。その人たちをまたいでトイレの中に入るわけです。そんな不衛生な状態ですから、感染症が広まりやすく、医療関係者だけで感染症の予防をすることでは不十分でした。区画を整備するなど、運営支援側も協力することで感染症予防を進めたのです。

■司令塔不在の避難所運営

2,500人以上の避難者に対して、支援者の数は150人強でした。それだけの支援者がいながら、なぜ人が死ぬかもしれないところまで追い込まれたのでしょうか。

それは司令塔がいなかったためです⁽²⁰⁾。避難所の最終的な運営組織図をご覧ください⁽²¹⁾。私たちのチームが入った時には、この右半分はありませんでした。その時は救護班からキッズ班までの5つの班しかなかったのです。

司令塔というのは、コーディネーターでもあるわけです。150人の名誉のためにも言わせていただきますが、一人一人の役場職員は身を粉にして、限界を越えて一生懸命に働いていました。

たとえば、4月11日、私が最初に現場に入って、各運営セクションの責任者に「今までどういう取り組みをしてきたか。今、責任者として課題とと思っていることは何か」というヒアリングをしました。その時に、郡山市を震度5強の強い余震が襲ったのです。ビッグパレットが崩れるのではと思うほどの揺れでした。揺れが収まった後に、スタッフに安否確認をしてもらったところ、怪我人は幸いにいませんでした。

そこで県の人間として、責任者に避難経路図を提出するように頼むと、驚くことに「ありません」と言われたのです。行政の最大のミッションは住民の命を守ることですから、避難経路図は人命を守るための重要なツールになります。もう1ヵ月も経つのに、避難経路図がない……。[それでは、名簿を見せてください]と言いました。名簿とは、命を守る基礎データとして非常に大事なものです。全体の人数、男女比、高齢者の数、中でも後期高齢者はどのくらいいるのか。また要介護者や、障がいをもった人はいるのかいないのか。いる場合にはどんな障がいがあり、どれくらいの等級なのか。妊娠中の女性はいるのかいないのか。未就学の乳幼児を持った世帯はどのくらいあるのか。DV被害者はいるのかいないのか……。そう



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

いうデータがあると、頭の中に避難所全体の地図が描けるわけです。そして必要な政策の立案、必要な事業を展開していくことができます。

「どうしました？ 見せてください」と言うと、「あるにはあるのですが、ビッグパレットは出入り自由ですので、まともな名簿がないのです」と言われたのです。そのときは非常時でしたから、感情的になっても仕方がないとは思っていましたが、さすがに「あなた方は一体、1ヵ月もの間、何をやっていたのですか？」と言おうと思って、改めてその方を見ると、その60歳手前くらいの男性は、髪はボサボサで髭は伸び放題、目の下はクマで真っ黒になっていて、私が怒鳴る前に思わず口から出たのは、「休んでいらっしゃいますか？」という言葉でした。そのくらいひどい状態だったのです。すると「4日働いたら1日休みなはずなのですが、実は1日も休んでいません」と言われました。

当たり前のことですが、行政職員も被災者だったのです。今日は詳しくお話する時間がありませんが、その後に県庁チームは、支援者のためのケア事業を展開しました。そういう日常の中で、役場職員も一生懸命働いていたということをお話ししたかったのです。

それでは、150人の職員は何をやっていたのか。答えは簡単で、やることが縦割りだったのです。救護班からキッズ班まであり、一人一人は一生懸命働いていましたが、バラバラに動いていたのですね。各班で情報の共有がされていませんでした。

たとえば、初めに住民がおかしいと思ったのは、救護班でした。彼らは、住民の中で血圧が高くなっている人が多くなってきているという事実気づきました。どうやらストレスだけが原因ではないようで、食事に問題があるのでないかと考えました。食事は給食班の担当でした。各班の担当者に共通のテーブルに座っていただき、救護班から出た「血圧の高い人が多く出ている」という問題に対して、住民に配っている弁当担当の栄養士を含め、弁当の業者と打ち合わせをして塩分を減らす取り組みをしてもらいました。私たち県庁のチームはコーディネーター、つまり司令塔として、問題をその場で判断して、その場で解決していく役割を担いました。

瞬間的に判断していかなければ、問題はどんどん溜まっていくものです。「今から20人ほどの人たちをビッグパレットに受け入れていただけますか」と連絡が来たことがありました。そうすると、どこのスペースに入っていただくのか、その場で判断しなければなりません。「もういっぱいなので、無理です」とは言えないわけです。何とか工夫をしてスペースをつくらなければいけない。そういった判断の連続だったわけです。

■普段やっている以上のことは絶対にできない

少し話が横道に逸れますが、大事なことを申し上げたいと思います。災害支援学などでは当たり前なことかもしれませんが、地震等の災害が起きて、初めて様々な問題が起きるわけではありません。つまり、もともとその地域が持っていた課題が、災害によって顕在化してくるのです。加えて、先ほどの問題もそうです



が、普段準備している以上のことは絶対にできません。マグニチュード9の地震が起きて揺れが止まった直後に、普段から縦割りだった行政の風通しが急に良くなって「行政全体でこの危機を乗り切る」ということにはならないのです。あるいは、バラバラだった地域、住民どうしのつながりが何もなかった地域が「我々は今まで間違っていたと思う。これからは一致団結してこの地域を皆さんで守っていきましょう」ということには絶対ならないということです。

岩手に大船渡市という地域があります。本当に大変な被害があった海沿いの町です。どの地区も海に面していて、各地区とも3桁以上の犠牲者が出ました。この大船渡市に赤崎地区という地区があります。

2011年夏、社会教育の大会に行った時に、赤崎地区の避難所にもなっていた赤崎地区公民館の吉田忠雄館長にお話を伺う機会がありました。多くの被害者が出た大船渡市の赤崎地区で亡くなった方は3人だったそうです。失礼とは思いますが「少ないですね」と言うと、吉田さんは「死ぬはずのない人が3人も死んだ」とおっしゃいました。

「何百年か前に大津波がありました。そのことがずっと言い伝えとして伝わっていたので、毎年、本気で防災訓練をやってきたのです。命をかけて。公民館を中心に、本当にそれだけ一生懸命、住民の命を守るのだと思ってやってきました。防災訓練の参加率は、毎年100%でした。だから、死ぬはずがなかったのに3人も死んでしまった」。

亡くなった方は、津波を見に行きたために巻き込まれたという話でしたが。

赤崎地区の被害はどの程度であったかということ、災害直後は自衛隊でさえ、赤崎地区に入れない状態だったそうです。最初に赤崎地区へ支援に入ったのはアメリカ軍です。空からやっと入れたくらいひどい被害でした。その時に赤崎地区の皆さんは何をやっていたのか。お風呂に入っていたそうです。妊娠中の女性もいたので、衛生面の課題として、住民の自治を基礎にしながら、海岸からホースと大きめのペットボトルを見つけてきて、シャワーのようなものをつくっていました。普段やっている以上のことは絶対にできないということ、赤崎地区の経験が私たちに教えてくれているのだと思いました。

■避難所での取り組み——専門機関との協働

避難所の中の取り組みをいくつかご紹介したいと思います⁽²²⁾。

一つ目が、女性の専用スペースづくりという取り組みです。先ほどの段ボールの仕切りをご記憶でしょうか。県庁の新チームが避難所に行ってから2～3日ほどして、数人の女性たちが連れ立って来ました。彼女たちは「私たち、毎日恥ずかしいのです」と言うのです。理由を聞くと「私たち、着替える場所がないのです」と。段ボールの仕切りで、人に見られながら着替えるのは誰だって嫌なものです。

避難所は、ある意味で人権問題の塊のような場所です。個人的な見解ですが、人権というのは「生まれてきて良かった」と思えるような人生を誰もが送ることができる権利及び自由のことを言うのだと思います。避難所が誰かにとって生きづらい、あるいは居づらいということであれば、それは当然、人権の問題なわけで



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

す。そのことに対して、支援者側の責任として、可能な範囲で一定の改善を図らなければならないという義務を負うわけです。

東日本大震災の支援活動の中で言われていることの一つは、「避難所の中で女性の視点が足りなかった」という点です。運営側に女性が少なかったという面もありますが、女性に加わっていただければいいという問題でもありません。女性の敵は女性という場合もあるからです。たとえば、「この非常時に着替えくらのことで何を言ってるの?」という声もありました。

様々な声を取り上げて、判断して対応していかなければならないので、私たちは女性の専用スペースをつくりました。日本の災害支援の中で、初めて避難所に女性専用のスペースをつくったということで、現在、内閣府のホームページにもこの事例が紹介されています。

写真では全部は見えませんが、右側にソファがあり、授乳スペースがあり、カーテンがかかった着替えるスペースがあります。女性週刊誌もあり、趣味の刺繍をやっている人が写っています。みなさんでお茶を飲みながら語らえる場所もあり、紙コップではない陶器のカップもあります。

また、避難所は段ボールの仕切りですから、雑魚寝みたいなものです。すると若い女性が寝ている隣に、男性がふざけて寝たりすることもあります。これは女性からしたら怖いものです。そういう意味で、このスペースは女性を守るシェルターのような役割も果たしました。利用者だけでなく、絶えず2名のボランティアスタッフが朝9時から夜9時まで常駐するという運営のシステムをつくっていました。

非常に喜ばれた取り組みが、下着のことでした。みなさん、着の身着のまま避難してきたので、下着の替えを持っていなかったのです。男性の下着はS・M・Lくらいしかありませんが、女性のブラジャーは一人一人に応じて、細かくサイズが分かれています。女性からブラジャーがないという悩みが出たので、下着メーカーとネットワークを結び、メーカーの人に女性の専用スペースへ来てもらいました。希望する人たちを計測してもらい、1週間から10日後くらいにブラジャーを配ったところ、とても喜ばれました。

それから、避難所の中に「おだがいさまFM」というラジオ局もつくりました。当時「おだがいさまセンター」という、いわゆる生活支援の拠点があり、週に1回「みでやっぺ!」という情報紙を発行していました。今も「おだがいさまセンター」で検索すると、0号からPDF形式でダウンロードすることができます。その一方で、避難所は照明が暗く、とくに高齢者には字が読みづらいという課題もありました。中には視覚に障がいをお持ちの方もいましたので、声の情報を出すべく、ラジオ局を開設することになったのです。

最後に「畑ごと隊」という取り組みを紹介します。東日本大震災の後、厚生労働省が生活不活発病の予防に関するキャンペーンを行いました。一日中動き回っていた人が、避難所のような何もなくなる生活の中で、急に体の動きを止めると免疫力が低下して、持病がある方は悪化してしまい、健康に支障が出てくるということです。その場合、体を動かすことが一番の予防になりますので、田舎の人が意欲的に取り組めるのは畑ごとだろうとスタートしました。



ご紹介した3つの取り組みには共通項があります。それは、避難所と専門機関との協働によって行われたという点です⁽²³⁾。避難が長期化すればするほど、避難所の中だけでは問題の解決を図ることが難しくなっていきます。そういった問題を解決するためにネットワークを築いていくことが大切です。あるいは、もともとあったネットワークを駆使して、専門機関や専門的な団体、NPOなどと協働することで、問題の解決を図っていくのです。

たとえば「畑しごと隊」は県立の農業高校や大規模農家の方とのネットワークを活用しました。また「おだがいさまFM」は地元のFM局と協働し、ラジオ局の開設まで1週間もかかっていません。女性の専用スペースは、福島県男女共生センターに協力していただき、運営することができました。

男女共生センターは、相談した翌日に「女性の専用スペースをオープンする」というチラシをつくってくれました。私がスタッフにチラシを館内に貼るように伝えたところ、男女共生センターの職員に慌てて止められたのです。不特定多数の目に触れるところにチラシを貼ると、女性の専用スペースという文字を見て男性が覗きに来るのでやめてほしい、ということでした。そこで、ビッグパレット中の女性用トイレの個室に貼ることにしました。

このように専門的な機関と協働する時に大切なことは、専門的なノウハウを活かすことなのです。専門機関と協働することは、避難が長期化すればするほど大事になってきます。私自身、社会教育の仕事を専門としていますが、例えば、公民館と地域の専門的な機関あるいは団体とネットワークを結びながら、住民とともに事業をつくっていくというのは社会教育の大事な仕事です。社会教育というのは、人づくりを通して地域を耕していくのが主題ですから。

一方、行政の最大のミッションは命を守ることだと思います。そのためには自治活動が重要です⁽²⁴⁾。交流の場の提供と自治活動の促進。これらが住民の命を守るための教訓です。阪神・淡路大震災の時に、なぜ仮設住宅であれほど多くの方々が孤独死を迎えたのか。警察の発表では233名といわれていますが、現場に入っていたNPOの報告を聞くと、総合すると900名を超えていたのではないかという話もありました。

未曾有の災害であった阪神・淡路大震災の時には、避難所が混沌としていてレイプ事件が多発し、一刻も早くプライバシーを確保できる仮設住宅に移すべきだ、とマスコミでも報道されました。行政側もそう思って仮設住宅を早めにつくり、避難者に移ってもらいました。ところが、安心で安全なはずの仮設住宅で多くの命が失われていったのです。自死をされたある方の遺書を読みましたが、その中の一文が奇妙だったことを覚えています。それは「もう一度避難所に戻りたかった」という文章でした。マスコミがあればほど「仮設がいい、避難所はダメだ」と言っていたのに、おかしいなと思ったのです。

その疑問の答えが、今回ははっきりわかりました。一人で避難されてきた方は、仮設に行けば当然、一人世帯ですね。理屈でもなんでもなく、人は一人ぼっちだと死んでしまうのだなと。寂しいと、人間というのは死んでしまうのだなということがはっきりわかったのです。「もう一度、避難所に戻りたかった」というのは、たしかに混沌としてはいるが、段ボールの仕切りの向こうにある息遣いやぬくもりを避



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

難所の中では感じる事ができた。だからこそ、もう一度避難所に戻りたかった、ということだったのだなと。つまり、交流の場の提供と自治活動の促進が、阪神・淡路大震災の時には、仮設住宅の暮らしの中で十分に保障されていなかった。だから、多くの命が失われていったのです。今回の福島支援の中で学んだことは、「交流の場の提供と自治活動の促進が人の命を守る」ということでした。

■生まれ始めた自治

先ほど、相馬市の避難所では、地域がまとまっているので自治もつくりやすいと言いましたが、4桁を超える人がいる避難所の中で、どのように自治をつくっていくべきか。

たとえば、100人ずつ分けるとします。1班の班長はあなた、2班の班長はあなた、と振り分けたら、自治ではなく、管理になってしまいます。管理からは何も生まれません。では、どうすべきでしょうか。

中越地震、阪神・淡路大震災、三宅島や雲仙普賢岳の噴火など、様々な災害を経験し、それぞれの土地で避難者を支えてきた中核メンバーが、続々とビッグパレットに来てくださり、私たちも多くの支援を受けました。とくに中越の方々は、2ヵ月近くずっと駐留してくださいましたが、経験豊富な彼らでさえ「どうしたらいいのか」と言うほどだったのです。

そこで、今までの日本の災害の中で何かヒントはないかと話し合う中で、「足湯とサロンは効果があったと思う」というアドバイスが中越の方からありました。もちろん、足湯で足が温まる事がどのように自治につながるのか。避難者がマグロのようにゴロゴロ寝ているところにお茶を飲むサロンをつくっても、お茶を飲みに来てくれるのかという、現場での議論もありました。でも、ヒントがそれしかないのならやるしかないと言って始まったわけです。

これは足湯の写真です⁽²⁵⁾。足湯という名称ではありませんが、実は傾聴ボランティアの一つなのです。たらいにお湯を汲んで入浴剤を入れて、足をお湯に浸けていただくことでリラックスできる。そして、ボランティアがハンドマッサージをしながら、被災者の人たちと色々話をしていくのです。この時のお話を「つばやき」と呼んでいるのですが、非常に重要なことを語ってくださるのです。マスコミがマイクを向けても決して語らないような本音を。しかも、そういった「つばやき」の中には、避難所の、あるいは避難生活を改善するためのヒントが隠されていることが非常に多いわけです⁽²⁶⁾。

この足湯は、阪神・淡路大震災の時に生まれて、能登半島の災害の時に「中越・神戸足湯隊」という組織が被災者を支えました。そして今回、ビッグパレットで「FUKUSHIMA足湯隊」というものができて、全県に広がっていきました。とくに学生たちを中心に結成されていましたが、私は彼らに会うといつもこう言います。「君たちは希望だな」と。活動していく中で、たとえば、足湯隊の人たちがハンドマッサージしながら「お母さんはどちらからですか?」とか「私はね、川内から来たんだよ」と話しているわけですね。そうすると、足湯隊のボランティアと被災者の間に交流が生まれていきます。その交流によって、被災者の皆さんに笑顔



が戻っていくのです。これは非常に重要なことで、交流の場を提供したことによって、本当に、一人一人の心がよみがえっていきました。

そして、サロン⁽²⁷⁾。お茶の場です。お茶の場といっても、長机をいくつか集めて、まわりに椅子を並べただけの場所でした。中越地震の時に、足湯のコーディネーターをやっていた若い仲間と、サロンの運営経験を持つ若い方が来てくださって、物資を並べていきました。出てきたのは銀色の口の細いやかんと、サーバーと粉のレギュラーコーヒーでした。つまり、喫茶店のコーヒーの道具が出てきたのですね。

「どうやって淹れればいいのか」と言っていると、床に寝ていた中年の男性が急に起き上がり、無言で近づいてきました。そして黙ってコーヒーの道具を取りあげ、コーヒーを淹れはじめたのです。やがてコーヒーのいい香りがしてきました。そうすると、周りの人たちが起き上がってきて、「コーヒーをごちそうしてくれるのかい?」と集まってきました。スタッフがコーヒーを勧めると、みなさんが紙コップを受け取って、椅子に腰かけたのです。そして、コーヒーを飲みながら語り始めました。

その時、コーヒーを淹れた人は、みなさんから「マスター」と呼ばれるようになっていきます。そして、マスターの手伝いをする人が出てきました。紙コップがなくなると補充したり、テーブルが汚れると拭いたり。そして彼は「偽マスター」と呼ばれるようになりました。その「偽マスター」は、マスターに用事があってお休みの日にも美味しいコーヒーを飲んでほしいと、コーヒーを淹れる練習をしていました。そのことが知れ渡ると、今度は「仮マスター」と呼ばれるようになっていったのです。

そのうちに、喫茶店の名前を決めようという話になります。富岡は町全体が桜の名所として、夜ノ森の桜が有名だから桜がいいという話になり、「みんなの喫茶さくら」という名前がついたのです。すると「お花の名前がついた喫茶店なら花があったほうがいい」と、毎日のように色々な人たちがお花を飾ってくれるようになりました。

ある日、「マスター、これ使って」と、大きい紙袋を差し出した人たちがいました。中には、陶器のマグカップがいっぱい入っていました。「どうしたの、これ」と聞くと、「いつも紙コップで飲んでいたら味気ないでしょ。みんなで使って」と言われたのです。また別の日には、「大勢が集まって大騒ぎしているものだから、まわりの床が汚れてしまって仕方がない。だから私たちにモップを貸してください」と言って何人かの人たちが掃除をはじめました。

人が集まる場をつくったことで、自治が生まれていったのです。サロンのテーブルの上に「私はこれができます」「それなら俺もできる」「それ私にやらせてよ」と、住民の人たちができることが積み上がっていきました。こういったサロンは、ビッグパレットが閉所を迎えるまでに全部で3店舗でき、全てが住民の自主運営でした。現在もサロンは継続しています。

この写真のマスクをかけている人が1号店のマスターです⁽²⁷⁾。こちらが2号店⁽²⁸⁾。ずいぶん広かったのです。15時半頃に撮った写真なので人が少ないのですが、16時近くなると、毎日かなりの人が集まってきました。それは、16時になる



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

と、福島ではテレビで『水戸黄門』が始まるからです。

先ほどの段ボールの仕切りの話を覚えていますでしょうか。やがて、避難所はこのようになっていきました⁽²⁹⁾。坂茂さんという世界的に有名な建築家の方が開発された間仕切りなのですが、サランラップの太い芯と布で、高さ2mほど。表札もついています。このように区画整備をして進めていくことで、住人の皆さんに場所を移っていただき、ノロウイルスの対策にもなりました。

私たちは、ビッグパレット全体で自治会をつくることだけではなく、ビッグパレットを一つのビレッジと捉えて、エリアごとに自治会をつくっていくことに成功していったのです。そういった交流と自治を保障し続けていくための仕組みが「おだがいさまセンター」です⁽³⁰⁾。そのミッションは、「住民の交流と自治を守り、コミュニティを再生する」ということでした。

■草むしり

災害時には、コミュニティが崩壊します。通常のボランティアセンターでは、外部に避難の要請をすると、外部の機関の方が助けてくれるものですが、「おだがいさまセンター」はそれだけではありません。「おだがいさまセンター」の特徴は、避難をしている人たちにもボランティアを呼びかけることにあります。ボランティアという言葉は使っていませんが、喫茶店もそうですよね。

活動の第一弾として行ったのは草むしりでした。「お世話になっているビッグパレットの草をむしろう、草むしり大会をしよう」ということでスタートした活動でした。「おだがいさまセンター」は、2011年5月1日に生まれました。

「天野さん、明日どのくらい来ますかね？」とスタッフに聞かれて、「20～30人、集まったら嬉しいね」と答えたのを覚えています。「軍手はいくつ要りますか？」と聞かれ、「50くらい用意したらいいかな。水分補給も大切だから、水もお願い」と用意してもらったのです。

そして当日を迎えました。集合時間は9時半でしたが、8時半くらいに、スタッフから電話がかかってきました。「天野さん、ちょっと大変です、来てください」。どうしたのかと思い、集合場所に行ってみると、そこにはすでに60～70人くらいの人たちが集まっていたのです。しばらくすると、ビッグパレットの出入口から、ほっかむりをした人たちが続々と出てきて、総勢250人ほども集まりました。

草むしりが終わってから、250という人数を支援側として、どう捉えたらいいのかと話し合い、「支援の拠点が求められていたのではないか」という結論になりました。それは、4月11日に私が見た、床にゴロゴロとマグロのようにたくさんの人たちが寝ている光景を思い出したからでした。人間、たった1ヵ月でこうなってしまうのか、人間は弱くて脆いと感じたあの光景を。でも、そうではなかった。本当に人間がダメになっていたら、草むしりのような機会があっても誰も集まることはないはず。4月11日に私が見たのは、これ以上、人間がダメにならないように、じっと目を瞑ってギリギリのところまで耐えていた人たちの姿だったのではないか。そうであるならば、支援者側には人間の強さ、人間の可能性を信じて支



援を続けていくことが求められているのではないかと思ったのです。

■ビッグパレットの夏祭り

2011年6月の中旬に、とあるエリアの自治会長が「天野さん、頼みがある」と、いらっしゃいました。聞いてみると「太鼓を貸してくれないかな」というのです。「太鼓で何をやるのですか？」と聞くと、彼は質問に答えずに「俺たちは、いつまでビッグパレットにいられるんだべなあ」と言ったのです。

「追い出したりしないから大丈夫ですよ、ここは県の建物だから」

「いや、それでも仮設住宅も作っているし、借り上げ住宅に行く人たちもこれから増えてくるし、きっと夏の終わりには誰もいなくなる」

「そうですね。でも、いつまでもこんな硬いコンクリートの床にいられないですよ。生活の再建もしていかななくてははいけませんし」

「だから、太鼓が必要だ。みんながバラバラになる前に、一回だけでいいから、相馬盆歌で盆踊りを踊りたい」

「相馬盆歌」というのは、3つある福島の方角の中で、浜通りにしか流れない、それこそふるさとの盆歌なのです。私はその話を聞いた時に、涙が溢れてきてしまいました。今でも、その時の自治会長の顔を思い出します。「バラバラになる前に、一回だけでいいから相馬盆歌で盆踊りを踊りたい」と言った顔を。

それから「みんなで盆踊りをやろう」という話がまとまって、翌日にはビッグパレットの中に「夏祭り実行委員会 実行委員大募集」のチラシが配られました。

7月半ば過ぎ、2日間にわたって、ビッグパレットで夏祭りが開かれました。その時、ビッグパレットには、被災者の方々は200人程度しかいませんでしたが、夏祭りに集まってきた町民は3,000名をこえていたのです。泣きながら盆踊りを踊る人たちの姿を、私は初めて見ました。「相馬盆歌っていいなあ」、「ふるさとの歌は、本当にいいなあ、あったかいなあ」、「来年も踊れるかなあ」、「来年も踊りたいなあ」と、みんな口々に言いながら踊っていました。

これは祭りの時の檣の上の写真ですが⁽³¹⁾、提灯も祭半纏も楽器も全部借り物でした。ですが、この夏祭りで流れた相馬盆歌は本物でした。本当にかっこよかったですね。

「おだがいさまセンター」の取り組みも含めて、交流と自治がいかに大事なのかという話を中心に、ビッグパレットふくしまでの169日間の物語についてお話をさせていただきました。ご清聴どうもありがとうございました。



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

対談

天野 2011年9月に『生きている 生きてゆく——ビッグパレットふくしま避難所記』という本を出版しました⁽³⁶⁾。避難所の中の生活について被災者の生の声がかかれていて、研究者からも高い評価を受けておりますので、ぜひご参考にしていただければと思います。本の収益のすべては、富岡町と川内村に寄附させていただきます。

阿部 天野さんに初めてお会いしたのは、2011年8月19日でしたか。あの時もそうでしたが、元気にさせてくれますよね。

天野 元気だけが取り柄です。暑苦しい男ですから（笑）。

阿部 先ほどのお話の続きをお聞きしたい方も沢山いらっしゃると思います。次の話題に移らせていただければと思います。ビッグパレットに避難された方々が、最初の「これが人間なのか」というところから、自分たちで「交流と自治」を蓄積されて仮設に移っていかれる中でも様々な形態がありますよね。

天野 そうですね。

阿部 現在、天野さんは仮設の方の「おだがいさまセンター」の取りまとめ役でいらっしゃいますが、ビッグパレットの「おだがいさまセンター」から今のセンターへ、同じような形で移ってこられたのか。そのあたりのお話をお聞かせください。

天野 避難には、「仮設」「借り上げ」「県外」という3つのパターンがあります。仮設が17～18%。借り上げは民間の「みなし仮設」と言われているものが半分を超えますが53%ほど。県外避難は30%ほどです。県外避難にも、各避難形をもとに支援の枠組みを考える取り組みをしています。この視点となるのが、「交流と自治」なのです。

たとえば借り上げでも、広域自治会をつくり、県外避難でも広域自治会をつくります。「交流と自治」を横糸にしなが、縦糸として取り組んでいる活動の一つが「命を守る」という活動で、もうひとつが「生きがいと居場所をつくる」という活動です。そこから織り成されていくのが、支援の形なのです。

仮設や借り上げの支援の仕組みになりますが、「命を守る」ということで取り組んでいるのが、命を守る基礎づくりとなる「名簿づくり」です。今、誰がどこで何を課題として、どのように過ごしているのかわからなければ、命に危険が増えることになってしまいますから。

一方、個人情報の壁があるとも言われておりまして、これに関しては、内閣府がガイドラインを示しています。JR福知山線脱線事故の後にできたものです。ガイドラインを簡単にご説明すると、緊急時には一定のルールをつくっておけば情報を提供することができるというルールです。役場と



「おだがいさまセンター」は、契約書を交わし、個人情報すべてを受け取っています。その上で、今つくっているのが「被災者支援管理システム」というタブレット端末を使った見守りのシステムです。また「生きがいと居場所をつくる」という視点では、草木染の工房をつくっています。これは7月7日に立ち上げられたものです。それから、畑も相変わらずやっております。

阿部 借上げの方々がバラバラになって、なかなかつながることができない。そういった状況の中、タブレット端末を用いて情報を彼らに伝えていくつなぎ役を「おだがいさまセンター」がやってらっしゃるのですね。

天野 はい。相互通信ということで役場もタブレット端末を配っているのですが、このタブレットは見守りのために使うタブレットなのです。借上げ住宅の方々が、みなさん国道沿いにお住まいであればいいのですが、大字、小字のところにも住んでいらっしゃるの、地図帳を片手に訪ね歩いていくと、何千世帯もある中で、1軒あたり1時間半もかかってしまいます。1日に2軒、3軒しか回れない。そこで、ICTの技術を用いて、衛星とつながっているタブレット端末を活用しています。車のナビと同じように、住所をクリックするとナビゲーションのアプリケーションが立ち上がり、被災者につながります。そうして、たとえば一人暮らしの77歳のおじいちゃんのところに行ったとしますね。タブレット端末には、カメラ機能も付いていますから、1枚写真を撮らせてもらえば、衣服が清潔かどうか、髪をちゃんと洗っているかどうか、テーブルの上に食物が散乱していないか、部屋は片付いているか、そうしたことが、たった1枚の写真でわかるのです。食事の状況などもシートに入力すると、クラウドのサーバーに同期されます。そうすると、端末には個人情報は一切残りません。クラウドの情報を操作できるのは「おだがいさまセンター」のメインのパソコンだけです。

阿部 富岡町だけでなく、多くの自治体がタブレット端末を導入しています。仕組み自体は同じですか？

天野 今、住民に配られているのは、役場からの情報を伝えるための電子回覧板みたいなものです。これは見守りのための仕組みですので、支援する側のものと言えます。

阿部 なるほど。避難者の方々の暮らしについて、これからもずっと仮設があるわけではない、あるいは借上げにずっといるわけではないだろうと思いますが、将来的にどのような形になるとお考えになっていらっしゃいますか。

天野 実は「セカンドタウン構想」というものを、災害復興学会の方に報告しました。仮設と県外避難についてはお話しましたが、住民の方々はバラバラに住んでいるわけです。アンケートをみても明らかなのですが、見通し



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

がないまま5年以上過ぎてしまうと、やがて郡山の仮設にいる人は郡山市民になってしまい、東京に避難されている方は東京都民になってしまいます。最悪のシナリオとしては、自治体解散ということになってしまうのです。チェルノブイリがそうですね。モニュメントを建てて「ここに旧〇〇市があった」という表記になってしまう。

つまり、富岡町だけでなく、すべての原発被災地にいえることですが、そうした事態は「ふるさと富岡」が消えてしまうことを意味しています。そのために今「仮の町構想」というものが生まれています。仮の町というのは、元々の地域に戻れるまでの仮の宿ということですので、退去期限も求められているため、住民の中の不安は拭えないわけです。

そこで、私が主張しているのは、元々あったまちを「ファーストタウン」と考え、元のまちに戻れるまではバラバラに住まざるをえない住民が、「仮」ではない、フルスペックのまちで、絆をつなぎながら暮らせる、第二のまちを誕生させようという構想です。避難によって仮設ではコミュニティが崩壊し、除染の効果も不透明だという状況の中で、二つのまちを持つ住民を誕生させようという考え方です。

「新富岡町」として、安心で安全な住環境があり、まちの機能が存続でき、住民の暮らしを基礎から築くことができるセカンドタウンをゼロからつくることにチャレンジするのです。21世紀において、たとえば課題に挙げられている「全国でもっとも医療費が少ない健康なまち」とはどういうまちなのか、あるいは「犯罪の発生率を極端に抑えられるまちづくり」にもチャレンジできます。また住むだけでコミュニケーションが深まっていくようなまちも、都市計画の専門家と協力してつくることのできるのではないかと考えています。

阿部 セカンドタウンは、多くの自治体が言いだしていますが、富岡町の場合、町民の方々の支持はいかがでしょうか。

天野 少なくとも、仮のまちやサテライト方式といわれる場所に対しては、多くの住民の方々は戻らないという選択をしています。とくにお子さんをお持ちの若い方は、復興住宅のような形では、安心して戻れないと言っています。セカンドタウンについては、フルスペックのまちを、汚染地域でないところに新たにつくるわけですから、そこで絆をつないでいける。神社仏閣等もつくるわけです。

ただし、たくさんのお金がかかります。細野豪志さんが復興大臣だった頃に直接訴えましたが、政治家はあまりいい顔はしないのです。とにかく除染をして戻すという答えなんですね。そのほうがお金がかからないですから。行政的にはそういう対応ですが、住民としては安心して暮らしたい。そして、いつかふるさとに戻りたいという願いを持っているわけで、その夢に応えられるのは、セカンドタウンしかないのではないかと私は思っています。



阿部 あと一点、お聞きしたいのですが、被災地の方、福島の方々は、今のよう
な形でずっとやってこられている。そこに、ボランティアの方も外から来て
活動しているというお話がありました。私たちのように首都圏に住んでい
る人たちは、これからどのような関わり方を求められていくのでしょうか。

天野 ありがとうございます。実は、他の会場に行っても「我々は、何をしたら
いいですか?」と言っていただく機会があります。そう言っただけの
は非常に嬉しいですね。今日、福島の人間の一人として、みなさまにお話を
しました。ここで聞いたことを「福島の人から話を聞いてきたのだけど、今
の福島はこうなっているらしいよ」と、ご家族、ご友人、職場の方、あるい
は地域の方々、一人でも多くの方々に、今の福島状況をお伝えいただくこ
とが、最大の支援になると思っています。

阿部 そうですね。風化してほしくないという声は、あちこちで聞きます。先
週、西の方に行っていたのですが、もう過去の話のような言い方をされま
すね。本当に風化させないということは大事なことだと思います。

先ほど、地域のネットワークや絆は、災害が起きる前につくっておか
なくてはならないというお話がありました。それは福島だけの問題ではなく
て、災害はいつどこで起きるか分からないということですね。東京直下
など、様々な予測もされているわけですので。日頃からの準備が大切だと
私は常々感じています。

津波の被災地である気仙沼へ、私も何度か入りましたが、気仙沼は亡く
なった方が非常に少ない地域です。というのも、気仙沼はESDのモデル地
域なんです。静岡大学の研究者の方が出したデータによりますと、気仙沼
や気仙沼周辺の自治体で亡くなった方々の割合は明確に低いという事実
があります。なぜ違うのかを尋ねてみると、「気仙沼の人たちは日頃から
ESDを通じたつながりがあったから」とおっしゃっていました。

天野 私もそう思います。「災害に強いまちってなんですか?」と聞かれた時
には、一言でいえば「人と人がつながっているまち」と答えます。「結果防
災」という言葉もあり、防災からのまちづくり、防災のためにどうするかと
いう考え方もあると思いますが、私は防災のためにというよりも、どうい
う地域にしていくかという議論を普段からやっていくことが、結果として
防災につながっていくという社会の姿をつくっていかねばいけないと
思っています。

阿部 「防災教育」ではなく、「災害教育」という言葉も提唱されています。災害
は必ず起きるものなので、災害が来るという前提で人と人のつながりをつ
くっていくことが必要だということですね。実際、私もそう感じています。



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

質疑 応答

質問者① 私は東京の豊島区に住んでいますが、コミュニティのない社会に住んでいると思います。たとえば、区では救援センターを何か所かつくっているのですが、私が見える救援センターは6つの町会を担当すると区から言われています。しかし、町会の組織率は50%を切っている。コミュニティがない状態です。町会の人同士もお互いを全然知りませんし、半分以上の住民はマンションの住民で、もともと地域と関係のない人たちです。そういうコミュニティのないような都市に災害が起きた時、避難所をどのように運営していけばいいのか、誰もわからない。何かヒントになるようなお考えがありましたら、教えてください。

天野 先日、東京都港区に行った時に、都市型の災害が起きた時にどうすべきかという話がありました。例えば、昼間人口と夜間人口が全然違う。夜間人口が20万人で、昼間人口が80万人という状態で、災害が起きる時間によっても対応は大きく変わる面とも言えます。都市型の場合は、会社も一つのコミュニティとして考えていくことが必要なのではないかと思います。3.11の時には、帰宅困難者の方々の半分以上が会社に一度戻ったという事実があります。そういったことから、会社の中にも自主防災組織をつくっていく取り組みが大事だろうというのが一つ。

それから、マンションのような集合住宅にお住まいの方々に町会にも入ってこないため、参加率が50%も切っているという場合。彼らが実際に災害に遭えば、町会に入っていない場合でも困るという現実があるわけです。札幌市のある町会では、マンションの居住者が非常に多い地域なのですが、ゴミ捨て場に「もし災害があった時には、この場所に逃げてください」ということを掲示するようにしています。誰でもゴミは必ず出すものですから。つまり、意志を変えさせていくよりも、災害があった時に命を救う場所を知識として持っているということを入り口としよう。そういう取り組みから、日常の中で避難する方法を伝えていくようにしています。この考え方は非常に良いと思います。今のお話にも生かせると思いますね。

ただ、コミュニティがない中で、マンションが沢山あるような地域で、首都直下型のような災害が起きた場合、暴動などが起きてしまうリスクもあるかもしれないと思っています。つまり、一定のルールをもとに田舎ではうまくいくことでも、中にはクレームを言う人も結構出てくるわけです。弁当を配ったか配っていないかで掴み合いの大喧嘩になるようなことも、都市の中では起きるかもしれません。そういったリスクへの対策というのは、今の私の頭の中にはありません。

ただ前提として、「災害が起きればどの方も困る」ということを考えるべきです。その中で、避難所に行ったら、コーディネーターが必要になるわけですが、その人材をどう育てていくべきか。これが二つ目の課題になるかなと思っています。



阿部 立教大学も、3.11以降、水の問題、トイレの問題など、どうしていくべきかを真剣に考えはじめました。地元との連携ですね。地元には、井戸を何か所か区内に掘ってあるのですが、そういったことにどう関わっていくのか。様々なことが2011年の震災を契機に具体的に進み始めています。しかし、まだまだ十分に交流ができていない面もあり、実際に災害が起きた時にどうするのか、私共も懸念しています。

天野 実際、災害が起きた時に、どこに逃げるかはおわかりでしょうか。この学校に避難する、公民館に避難するということは明確になっていませんでしょうか。

阿部 学生は大学ですね。いくつか公園もありまして、避難地区になっているのですが、そのあたりのデータは、まだまだでしょう。

天野 そこですよ。災害があった時にどこに逃げるのかを知っておくこと。それが第一歩だと思います。

質問者② 社会学研究科の院生です。セカンドタウン構想についてお聞きします。フルスペックのまちということで、すぐに思い浮かぶのがダム建設です。村ごとどこかに移住するようなことがありますね。現実性を帯びるのであれば、そういうことをセカンドタウン構想で考えていらっしゃるということでしょうか。

天野 はい、そういうことです。仮の町構想は、避難先の公共施設も含めて共有することです。そうではないフルスペックのまちとは、それと対峙する言葉ですよ。しかし、三宅島の例では4年後でも実際は60%しか戻っていません。今回は原子力災害があったので、人数はもっと減るのかもしれませんが、ただ、住民の拠り所にはなりますよね。例えば、あそこに富岡町がある、大熊町があるというような。そういう拠り所をつくっていかねばならないのではないのでしょうか。それが、希望になるのではないかと思います。

質問者③ 福島県の南相馬市で、仮設住宅の中でのサロン運営と、臨時災害FM局の運営の支援をしてきました、JVC（日本国際ボランティアセンター）という団体の者です。

阪神・淡路大震災のお話の中で「もう一度、避難所に戻りたかった」と言って、自死された方のお話がありましたが、南相馬でも、もしかしたら似たようなことが起きることもあるのでしょうか。その言葉が、「もう一度、仮設住宅に戻りたかった」だとしたら、やはり高齢化が進んでいます。そうでなくても、若い人たちがどんどん外へ出て行ってしまっている中で、仮設住宅から移転する先が決まって、離れていく人



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

たちも出てきます。けれども、除染が終わって村に戻って見たら、あまり人がいないという状況が出てくると思うのです。その中で、先ほどお話があったような交流や自治が成り立つのかなという心配があります。そういった状況を想定した場合、私たちはどのような対策や手立てを講じていく必要があるのでしょうか。

天野

私もそれは非常に危惧しているところです。まちというか、コミュニティは、実は子どもからお年寄りまでがいて一つのコミュニティなわけです。今、福島大学で取っているアンケートでも明らかですが、若い人ほど「除染しても戻らない」と答えています。そして、原発立地の役場でも若い職員が辞めると言っています。そういう傾向が出てきている中で、何が起きるのか。それは、高齢者や障がいをお持ちの方、あるいは要介護者の方、つまり役場がないと生きていけない人たちだけが戻っていくのではないかとということです。だとすれば、限界集落の新たな誕生を示唆するのではないかと危惧しています。ですから、そういう意味でも問題を解決できるのは、セカンドタウンなのではないかと思っていますが、先ほどからお話しているとおり、行政的にみるとフルスペックのまちをつくるためには非常にお金がかかる。そういう面から、なかなか踏み切れないのではないかと考えていますが、セカンドタウンのようなことをやっていかなければ、人々の希望はつukれないと思っています。

阿部

天野さん、本当にありがとうございました。これからもまだまだ続いていくでしょうが、ご健康にお気をつけてください。



資料

あの時避難所は…
おだがいさまが支えた
169日間

福島県内最大級の避難所「ビッグバレット
ふくしま避難所」が教えてくれたこと

元ビッグバレットふくしま避難所副所長 菅野 和彦
菅野 和彦さん（左）と避難所スタッフ（右）の交流の様子

1

5月29日の朝刊から…



2

■ 「ふるさと」がなくなるということ

「ふるさと」という言葉のもつ意味について考える
誰もがもつ「ふるさと」。あなたのふるすとは、ど
ういうイメージですか？

3



4

富岡町・2011年3月12日



5

富岡町・2011年3月12日



6

あの時、避難所は…おだがいさまが支えた169日間



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間



7



8



9



10



11



12



13



14

生命を守る から 生きがいづくりへ

避難所での取り組み

15

避難者の入所は3月16日
福島は雪が降っていた

人が死ぬかもしれない…
4月11日、県庁運営支援チーム
を派遣

16



17



18

あの時、避難所は…おだがいさまが支えた169日間



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間



19

■ 避難所入所時のコーディネート

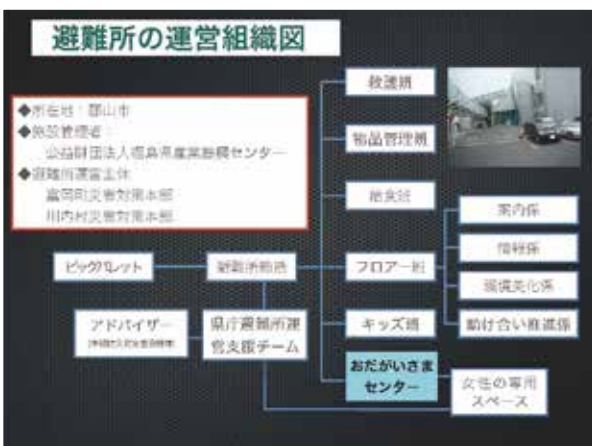
- ・災害弱者が2階や3階に入居！はなぜ生まれたか
- ・震度5強の余震—避難経路図と避難者名簿がない？
- ・支援体制は150名超！でもバラバラな動きが



司令塔の不在

「交流」と「自治」に基づき、避難所からその後の生活を見通した青写真をつくる機能も

20



21



22

■ 「災害弱者」への具体的支援

- ・女性の専用スペース誕生・・・女性への支援
- ・おだがいさまFM誕生・・・高齢者、視覚障害者
- ・畑ごとの誕生・・・生活不活発病、生きがい対策



避難所と「専門機関」との協働

23

■ 生命を守るためには自治活動だ！

・・・阪神と中越から学ぶ

- ・阪神・淡路の震災時になぜ仮設住宅で多くの孤独死が生まれたか

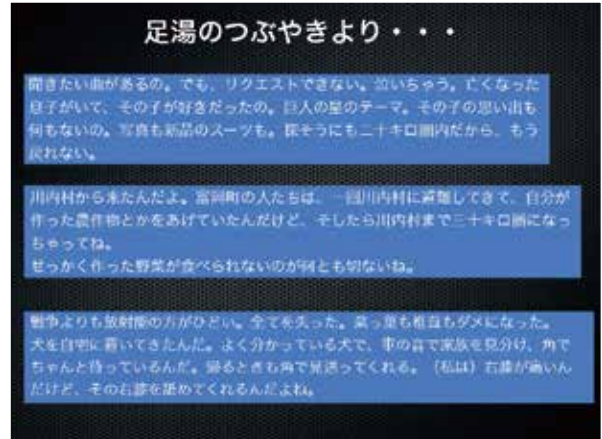
※ 交流の場の提供と自治活動の促進

- ・そんなの効果あるの？—サロン（喫茶スペース）と足湯の設置

24



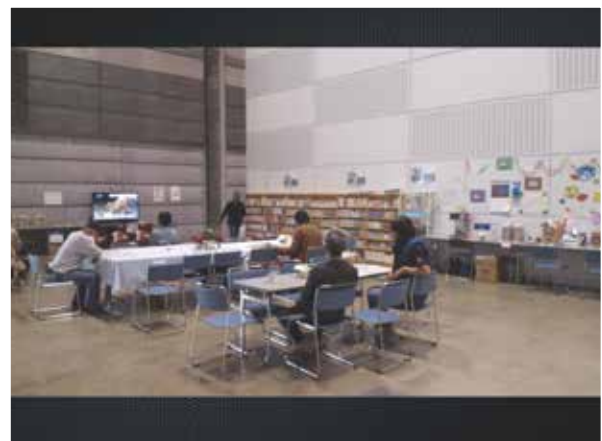
25



26



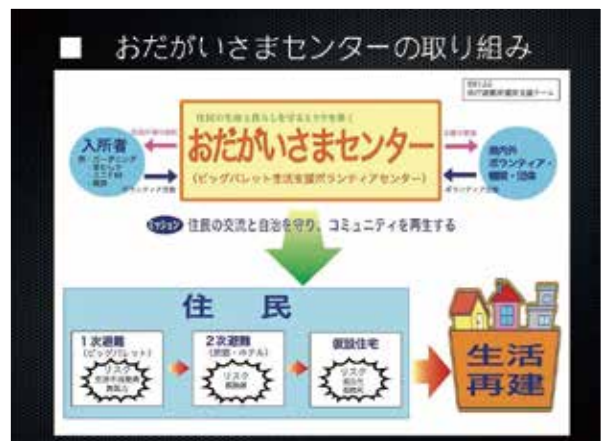
27



28



29



30

あの時、避難所は…おだがいさまが支えた169日間



あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

あの時、避難所は…“おだがいさま”が支えた169日間

■ おだがいさまセンターの取り組み

- ・おだがいさまセンターの活動に確信を持った日
- ・住民の願いをかたちに・・・夏祭りをなぜ開催したのか

花植え祭

夏祭り

31

■ おだがいさまセンターの取り組み

- ・今日はありがとう
- ・・・Bホールにできたはじめての自治会

32



33

災害弱者である子どもについて

- 大人たちの狭間で揺れる子どもたち・・・
- こんな時には、大人が手をつなぐんだ！
- 支援チームにある日届いた手紙
- 子どもを守る。子どもにつながる親や地域を守る。
- 行政の公平性と血の通った行政は矛盾してる？

34

■オール福島だ！オールJAPANだ！

- ・おだがいさまセンターって災害がなくても必要だ！
- ・・・公民館じゃだめ？
- ・社会教育（関係職員）の可能性
- ・・・人がつながっているまちづくり
- ・住民・NPO・高等教育機関・行政
- ・・・お互いの役割分担を！
- ・被災地責任ということ
- ・・・ふくしまの知恵の集積を！

「ふくしまをあきらめない」

35

■ 被災地責任として

非日常の空間で、日常の生活を送らなければならなかった人々・・・被災を受けた地域は自らが経験したことをしっかりと記録に残し、次に繋げてゆく「被災地に課せられた責任」がある。

被災者の発信「ビッグハレットふくしま避難所」の記録

36



天野和彦氏 講演会 アンケート

● 今回の講演会に参加された理由等をご記入ください。

- ボランティアの経験をうけて被災地の今を知りたかったから。
- テーマに興味を持ったから。
- 東京で想定される震災に備えて、東北地震での経験を聞き、事前に考えられる対策を考えていきたい。
- ①東日本大震災のことについてはしっかりと知っておきたい。 ②文学部で「環境教育論」の講義をしている。そこで放射能についても扱っている。
- 今年に入り、福島原発事故の風化が目立ってきているため、逆に関心を持ち続けなければならないと考えた。
- 福島の講演会だったため。
- 福島での報道には流れない現実を知ることができればと思い参加しました。
- 被災地理解を深めるため。
- 阿部先生のお声掛けがあったから。これまであまり積極的に震災関連の話を聞いてこなかったため、この機会に話を伺ってみようと思ったため。
- 地域・社会再生の糸口をお聞きできると思いました。
- 福島県南相馬市で仮設住宅でのサロン運営と、臨時災害エフエム局の運営支援をしており、共通した課題に対する取り組みを知りたかった。
- 友人の紹介。

● 講演会のご感想、ご意見等をご記入ください。

- 話は詳しくて分かりやすかったが、もっと専門的な話も含めて聞きたかった。これらの活動がどうやったら政策提言につながるのかを考えてみたい。
- 実際に経験された体験談は非常に貴重であった。
- コミュニティ、コミュニケーションのあり方について学べたと思います。それで、私には何ができるのだろうかと思いました。すばらしい講演だったと思います。
- 大規模な避難施設で、また、避難生活が長期化する内での生活の組織的なサポートについて聞いたことがなく、運営をどのようにしているかを知れてためになった。国は、復興々と声高に上げ、増税等をしているが、現地の人が生活再建をするにあたり何も役立つことがない。どのような支援が生活再建のために必要なのか、どのようなサポートが被災者の方に必要なのか考えさせられました。
- 講演の中で「心の復興」・「人間の復興」が重要だといわれていたが、本当にそうだと思った。たとえ、町が元に戻ったとしても、そこに住む人々自身の回復なくして本当の復興は永遠にこない。心のキズは簡単にはなくなるものではないと思う。だからこそ、人のあたたかさが大事になってくると思った。
- 参加者の年齢層が様々で、幅広い人の関心があったと思う。



天野和彦氏 講演会 アンケート

- 希望を失うと人は死ぬ、という言葉が印象に残りました。ふるさとを失った人々の気持ちを想像すると心が苦しいです。そんな中で、場や機会を与えられた時の人々の息づく様子をお伺いし、人の強さを感じました。また、失ったものは大きいですが、ふるさとは人々の想いがあれば再生できると希望を持つことができました（足湯・サロンのお話から）。
- この1年半、数多くの講演会に出席、情報収集をしてきましたが、今回の天野さんのご講演内容ほど深く残ったものはなかったように思います。それは、ご専門の社会教育の観点から、人・社会・つながりに焦点をあて、交流と自治意識の意義を、実社会をとおして見事にまとめられておられました。「交流」と「自治」はビッグパレット内のみならず今の日本すべてのまち・社会でのキーワードであり、その再興と再生が求められていると思う。
- とてもたくさんのヒントと情報が頂けました。ありがとうございました。
- 富岡町でのセカンドタウン構想や、支援と自治/いのちを守る、いきがいと居場所の大切さのお話がとても印象的でした。

あの時、
避難所は…
“おだがいさま”
が支えた169日間